BOOK IX — 自由の代償

第09章 — 離別

01 — 最後の出発便

最後のバスは、乗客を一人も乗せずにバスターミナルを出ていった。ロイはガラスの向こうの道路をゆっくりと走り去る車両を見ていた。行き先表示には明かりがついていたが、何も表示されていなかった。

交通局の制服を着た女性が待合所を回り、残っている乗客に、その晩はもう出発する便がないことを告げた。申し訳なさそうだった。翌朝については何の情報も与えられていなかった。

レイチェルは、歩行者用の出口が開いたままになるのか尋ねた。

「建物を閉めるまでは。まだ通りに出られますよ」

女性は、ロイがコートの内側に引っ込めていた手に目を向けた。ロイは手を温めようとしていたのだ。女性は救急車が必要かと尋ねた。

「病院から来たんです」とレイチェルは答えた。

女性は、この一時間、病院についてさまざまな人の話を聞いてきた者らしい同情を込めてうなずいた。それから入口近くにいた家族連れに声をかけに行った。

ロイは、レイチェルが水と包帯類をまとめるのを待ってから立ち上がろうとした。工事現場を離れたときよりも力が必要だった。そのことは口にしなかった。レイチェルがすでに理解している状態がさらに悪化したと告げても、できることには限りがあった。

入口では、普段は広告に使われているスクリーンに市当局からのお知らせが表示され始めていた。最初は交通機関の運行停止についてだった。二つ目は、放置された医療機器や緊急の治療を必要とする人を見つけた場合、通報するよう市民に求めるものだった。

三つ目は別の機関からのものだった。

「公共の安全確保への協力要請」という見出しの下に、写真が現れた。ロイはそれが自分の顔だと分かったが、いつ撮影されたものか思い出せなかった。写真の彼はわずかに横を向いていた。髪は今より短かった。

告知には、治安作戦の最中に医療施設を離れた人物について記されていた。その人物に近づかないよう警告し、所在に関する情報を当局に提供するよう求めていた。

ハヴェルについては触れられていなかった。写真の男が何らかの罪で有罪判決を受けたとも書かれていなかった。

レイチェルは、告知が消える前に読むのをやめた。

「いたるところに出してるわ」

ロイは交通局の制服を着た女性をちらりと見た。彼女は乗客が帰宅する手段を手配するのを手伝っていた。彼女があの写真を見るまで、どれほど時間があるだろうかとロイは思った。

二人は外に出た。

かつて彼は、自分が存在していることを機械に認めさせることさえできなかった。事務所に立たされ、担当者たちが彼の名前と確認可能な何かとのつながりを調べるのを待たなければならなかった。

今、政府は誰もが彼の顔を知るよう、並々ならぬ労力を費やしていた。

02 — 通りの上の部屋

雨はさらに細かくなっていた。ひさしの下や建物の隙間から吹き込み、乾いているように見える歩道まで濡らしていた。レイチェルはロイを急がせることなく、隣を歩いた。二度、閉まった店の前で足を止め、彼が息を整えている間、ショーウィンドウを眺めているふりをした。

通りの端近くにある小さな商業ビルの入口脇には、家具付きの貸し部屋の案内板が出ていた。入居者の多くは短期契約で雇われている労働者だった。レイチェルは中に入り、今夜泊まれる部屋があるか尋ねた。

受付の男は、市内の混乱について伝えるラジオ放送を聞いていた。北部の交通路線が停止した後、三人の宿泊客が予約を取り消したのだという。二階に部屋があった。エレベーターは故障していた。

彼女は入口の方を見た。ロイは外に残り、壁にもたれていた。

「何とかなります」

男は宿泊登録の手続きを始めたが、途中で手を止めた。端末が市のサービスへの接続を完了できなかった。再び試し、その晩に相次いでいる通信の途絶に不満を漏らしてから、レイチェルに連絡用の名前を書いてほしいと頼んだ。彼女が部屋代を支払うと、男は古い機械式の鍵を渡した。

「何か必要でしたら、夜の十二時まではここにいます」

彼女は礼を言った。

ロイを二階まで連れていくのに、五分近くかかった。部屋には狭いベッドが二台、電気ケトル、流し台、それに隣の建物の屋根を見下ろす窓があった。壁には海辺のリゾート地の写真が額に入れて飾られていた。色があせ、空と海はほとんど見分けがつかなかった。

レイチェルはロイがコートを脱ぐのを手伝った。傷を覆う包帯は外側の縁が濡れていた。イマニから触らないよう指示された部分には手をつけず、交換できる部分だけを取り替えた。

ロイは、研究の観察記録が雨で傷まなかったかと尋ねた。

「大丈夫よ」

「見せてくれ」

彼女はコートの内側から封をした包みを取り出した。中には、手書きの観察記録とともに小型の記憶装置が固定されていた。ロイに見えるようベッドの上に置き、それから再びしまった。

エイドリアンが収集した資料のすべてがその包みに入っているわけではなかった。入っている資料だけで実験を再現できるとも限らなかった。それは、政府が今になって変更しようとしている条件の下で始められた研究の記録だった。レイチェルがそれを持ち出したのは、研究室が今後も研究を続けることを許されるかどうか分からなかったからだ。

ロイはケトルに目を向けた。

「最後までやらせてくれると思うか？」

レイチェルはケトルに水を入れた。

「私たちに尋ねるつもりはないと思うわ」

数分間、ケトルが水を温める音と、流し台の下にある小さな冷蔵庫の音以外には何も聞こえなかった。ロイは靴も脱がずに横になった。湯が沸くまでは起きているつもりだった。

レイチェルが振り返ったとき、彼の目は閉じていた。

03 — もう一人の対象

ヴェイル大佐の幕僚たちは病院の管理棟から移動していた。新しい作戦室は、その地区から少し離れた政府施設の中にあった。ハヴェルが死ぬずっと前から使用されていた施設だった。窓はなく、壁の時計は、それぞれの下にあった都市名の表示が取り外されているにもかかわらず、各都市の時刻を示していた。

デレンが到着したとき、病院での作戦は重なり合う複数の任務のうちの一項目になっていた。民政当局は道路、医療サービス、市民の混乱に関する情報を求めていた。別の連絡班が研究機関への対応に当たっていた。

一人の幕僚が、スクリーンに映るロイの写真の隣にレイチェルの写真を表示した。

デレンは、その理由を尋ねた。

「現場を離れたとき、彼と一緒にいました」

「彼女は確保命令に記載されていない」

幕僚はそれを認めた。補足指示が作成されているところだった。

デレンはその草案を読んだ。レイチェルは、対象の所在を特定し、研究計画に関わる資料を回収するために協力を得る必要がある人物とされていた。文書は、ロイの移送先として予定されている施設に彼女を連行することまでは許可していなかった。ただし、関与の程度が評価されるまで拘束することは認めていた。

「容疑は何だ？」

幕僚は、法務部門からその用語を使うよう助言されてはいないと答えた。

デレンは草案を机に置いた。診断棟で、ロイの負傷した腕を診察するよう強く求めていたレイチェルを見ていた。彼はその記憶と紙面の記述を照らし合わせようとした。記述に明らかな虚偽はなかった。彼女はロイと一緒にいた。移管を妨げた。政府が欲しがる情報を持っているかもしれなかった。

文書に欠けていたのは、それらの行動のいずれについても、彼女の判断が正しかった可能性だった。

デレンがまだ文書を読んでいるとき、ヴェイルが入ってきた。更新された一般向けの告知が配信されたか尋ねた。

「ロイに関するものは配信済みです」

「女の方は？」

「補足指示には承認が必要です」

ヴェイルはスクリーンを見て、承認の責任者の名前を尋ねた。補佐官がその名前を告げると、大佐は電話をかけた。

部屋の奥では、M-04が他の機密指定要員とともに立っていた。灰色のコートの女は、士官から拡大された任務について説明を受けていた。二人目の人物も、当初の確保命令における対象として扱うのかと尋ねた。

士官は、二人の指定区分は異なり、別の通達があるまではそのままだと答えた。

彼女はそれ以上何も尋ねなかった。

デレンは、その区別が都合の悪いものになったときにどう行動すべきか、誰かが彼女に教えているのだろうかと思った。

04 — 記録が運べるもの

廊下で誰かが重い物を落とした音で、ロイは目を覚ました。自分がどこにいるのか分からず、しばらく動かなかった。やがて、部屋に一つだけあるランプをつけて窓辺に座っているレイチェルが見えた。

彼女は小さなテーブルに数枚の紙を広げていた。元の観察記録はまだ包みの中にあった。別の紙には、実験の順序、その実施条件、そして未解決のまま残された疑問を書き出し始めていた。

「眠った方がいい」とロイは言った。

「あなたもね」

ロイは天井へ顔を向けた。腕は動かさなくても痛んだ。研究室の装置で少しずつ上昇していった数値、持ち上げるよう求められたカップ、そして改善を回復と取り違えないようイマニが慎重に注意していたことを思い出した。

レイチェルは、記録された測定値の一部はエイドリアンの元のファイルなしでは役に立たないと告げた。二人が持っているのは研究の一部だけだった。研究室が接収されれば、彼女が持っているものをすべて守り抜いたとしても、結果の一部は失われるかもしれなかった。

ロイは、その記録があれば誰かが研究を引き継げるのか尋ねた。

「すぐには無理よ。でも、私たちが何をしようとしていたかは分かる。同じ疑問から始めなくても済むわ」

彼はしばらく黙っていた。

「なら、それを別の場所へ持っていくべきだ」

レイチェルはペンを置いた。

「別の場所へ行くわ。二人で」

彼は上体を起こした。その動きで、一瞬、視界の周辺が暗くなった。それが消えるまで待った。

「病院で何と言われたか聞いただろう。彼らには俺の身体が必要だ。研究の意味を理解できる人間も必要だ。二人が一緒にいれば、両方とも手に入れられる」

「私があなたをここに置いていって、あなたがベッドから起き上がれなくなったら、どうなるの？」

彼にはまともな答えがなかった。

レイチェルは紙を折り、包みに戻した。一緒にいる危険は理解していると言った。一人にする危険も理解していた。最初の危険についてどれほど冷静に話し合っても、もう一つの危険を消し去ることはできなかった。

彼は再びベッドに身体を横たえた。

使わずに置かれていた紙の一枚に、彼女は百という数字を書き、その後に疑問符をつけていた。レイチェルが彼の視線に気づくまで、ロイはそれを見つめていた。

「疑問なのよ」と彼女は言った。「約束じゃない」

「分かっている」

彼女はその紙も回収した。

百年よりはるかに短くても受け入れるつもりだと、彼は伝えたかった。以前にも、はるかに短い時間を受け入れてきた。だが、この研究はもはや彼にどれだけの時間が残されるかという問題だけではなかった。その晩に自分の身に何が起きるかという理由で、彼女に研究を放棄するよう求めるのは間違っていると分かっていた。

05 — 変わってしまった通り

午前零時少し前、受付の男が部屋の扉をノックした。折り畳んだ毛布を持っていた。レイチェルはそれを受け取れるだけの幅に扉を開けた。

男は、近辺に軍の要員が到着したと説明した。いくつかの商業ビルでは、当局の検査が終わるまでその場にとどまるよう、建物内の人々に求めているという。

「ここでは上の階まで来ないと思いますよ。おそらく病院の件でしょう」

彼女にも同意してもらいたいような口ぶりだった。

レイチェルは毛布の礼を言い、扉を閉めた。窓辺に戻ると、建物の屋根の上を航空機が飛んでいた。その灯りが建物の側面を横切り、消えた。

ロイは立ち上がった。

地上では、交差点の近くに小さな人だかりができていた。二人の士官が配送車に乗っていた人々と話をしていた。その向こうでは公共交通の車両が引き返すよう指示されていた。歩道の人々は、そのまま歩き続けてもよいのか確かめようとしていた。

レイチェルは、眠っている子供を抱いた女性が士官の一人に近づいていくのを見た。短い会話の後、女性は通行を許された。他の者たちはその場に残された。

軍の展開状況は場所によってまだまちまちだった。人々は普段どおりの用事で行き来していたが、それを許すかどうかを決めるのは、もはや必ずしも自分たちではなかった。

ロイはコートを着た。レイチェルにもう一度包みを見せてほしいと頼んだ。彼が残りの包帯類と水が入ったバッグに目を向けるまで、彼女にはその理由が分からなかった。

「それも持っていけ」と彼は言った。

「ロイ」

「今すぐ行けと言っているんじゃない」

彼はコートの前を閉じた。レイチェルは負傷した肩の近くの留め具を留めるのを手伝い、そのまましばらく布地に手を当てて立っていた。

二人は毛布を折り畳んだままベッドに残し、階下へ降りた。

受付の男は電話で話をしていた。二人が出ていくのを見て驚いた様子だった。レイチェルは予定が変わったと伝えた。男は移動手段を手配しようかと尋ねたが、彼女は断った。

通りに出ると、隣の街区で当局からの告知が拡声装置を通じて読み上げられていた。その言葉は交通の騒音と雨音にかき消されそうだった。

レイチェルには、作戦対象者を支援する者に関する一節が聞こえた。

入口を離れようとしたロイを、彼女は引き止めた。道路の向こう、歩行者向けのスクリーンに彼の写真が再び表示されていた。今度はその後に、最初の写真ほど鮮明ではない二枚目の画像が続いた。レイチェルは、その日の午後に着ていた自分のコートだと分かった。

数秒間、どちらも動かなかった。

病院で士官が設けた区別は、軍の文書のどこかには残っているとしても、街頭からは消えていた。

06 — 二つの道路の間

二人は高架道路の下にある、屋根付きの歩行者用横断通路にたどり着いた。通路は商業ビルが並ぶ一角と住宅地区を結んでいた。両方向に人々が行き交っていた。仕事を終えた者もいれば、営業を続けていた店の袋を提げている者もいた。

レイチェルはコンクリートの柱のそばで足を止めた。ロイは足を引きずっていることを隠せなくなりつつあった。彼のために別の部屋を探したかったが、思いつく場所はどれも、前の場所より一時的なものに思えた。

彼は彼女の手を取った。

「誰かに決められる前に、俺たちで決めなければならない」

彼女は頭上の道路を見上げた。軍の車両は見当たらなかった。それでも安心はできなかった。

二人は以前にも、離れ離れになった場合の待ち合わせ場所について話し合ったことがあった。それは差し迫った問題ではなく、起こる可能性の低い問題に思えていた頃のことだ。そのうちのいくつかは今や規制地区の中にあった。その一つは、すでに二人のために十分すぎるほどの危険を冒した人物の場所だった。また別の場所は、記憶しているとおりの姿で存在していると、もはや考えることはできなかった。

レイチェルは影響を受けていない地区にある場所を一つ挙げた。特別に都合のよい場所というわけではなかった。ただ、二人とも知っている場所だった。

ロイは、行けるようになったらそこへ向かうと答えた。それがいつになるかは、二人とも言えなかった。

「あなたがいなかったら、どれくらい待てばいいの？」

彼は彼女を見た。具体的な数字を伝えたかった。その欲求は不合理なほど強かった。時刻さえはっきり言えれば、離別は、また会うつもりでいる二人の間のごく普通の約束に似たものになったはずだった。

「危険になったら、そこにいるな」

「そんなことを聞いたんじゃないわ」

「分かっている」

歩行者の一団が通り過ぎ、ロイは脇に寄った。レイチェルが両手で自分の左手を握っていることに気づいた。

彼は、自分を捜しに病院へ戻らないでほしいと頼んだ。政府が彼を拘束したと発表しても、その発表によって拘束されている場所が分かると思ってはいけない。何よりも、解放するという約束だけを頼りに、彼と引き換えに記録を渡してほしくなかった。

彼女は、自分に何をすることが許されるのか、前もって彼が決めることはできないと言った。

「頼んでいるんだ」

彼女は彼の顔を見て、それからほとんど動かせない腕を見た。

「なら私も頼むわ。彼らがあなたを所有できないと証明するためだけに、殺されるようなことはしないで」

彼はうなずいた。

その言葉は、彼が表情に出した以上に深く突き刺さった。拒絶することと生き延びることの区別が、はっきりしているように思えた時期があった。今、どちらにどれほどの代償が伴うかも分からないまま、その境界の中で生きるよう求められていた。

07 — 次に会う日まで

横断通路がまもなく閉鎖されるという最初の兆候は、二人の方へ歩いてくる人々の中に現れた。一人の男が電話を耳に当てたまま急いで通り過ぎた。その後ろでは二人の女性が立ち止まり、壁の地図を確認していた。警察が高架道路の下から全員退出するよう求めた、と誰かが言った。

ロイとレイチェルは柱から離れた。

通路の向こう側では、一人の士官が階段の近くに集まった人々に話をしていた。反対側の入口にも別の士官たちの姿が見え始めた。群衆は静かになった。規制がいつまで続くかについての告知はなかった。

ロイはレイチェルを振り返った。最初の指示が出されたとき、二人は一メートルほどの距離に立っていた。今はその間に何人もの人が入り込んでいた。

彼女がこちらへ向かって動き始めるのが見えた。

彼は首を横に振った。

彼女は足を止めた。

階段のそばにいた士官が通信を受け、通路の方を向いた。何が伝えられたのかロイには聞こえなかったが、出てくる人々の顔を一人ずつ確かめる士官の姿を見た。その動きに見覚えがあることが、彼を不安にさせた。病院でも見た動きだった。彼に会ったことすらない人々が、彼の身に何が起きるかを決める許可を与えられていた場所だった。

レイチェルは住宅街の方を見た。まだ何人かの歩行者がそちらへ退出することを許されていた。ここに立っている間に、その機会が消えてしまうかもしれないと分かった。

彼女はロイの方へ向き直った。

彼はもう一度彼女に触れたかった。周囲で行われている作戦とは何の関係もない言葉を、何か伝えたかった。一瞬、研究が終わったらするつもりだった、ごく普通のことの数々が頭をよぎった。そのどれも、今では特別に大きな望みには思えなかった。

入口付近で怒鳴り声が上がった。外にとどまるよう告げられた誰かが、通路に戻ろうとしたのだった。何人もの人が一斉に動いた。

群衆の動きに押され、レイチェルは彼からさらに数歩離れた。まだ彼の顔が見える場所で立ち止まった。

ロイは左手を上げた。手を振ったのではなかった。まるで彼女がまだその手を取れるかのように、しばらく上げたままにしていた。

それから手を下ろし、背を向けた。

商業ビルの方へ向かう人々の背後に、彼の姿が消えていくのを彼女は見ていた。一瞬、その人々の向こう側に再び彼が現れると思った。人の流れがまばらになったとき、彼はもうそこにいなかった。

一人の士官が彼女に住宅街の方へ進むよう指示した。

レイチェルは他の人々についていった。包みを入れたコートの内側に、手を当てたままだった。

彼女が運んでいるものが百年の始まりなのか、それとも五日間の研究の最後の記録なのか、分からなかった。

分かっていたのは、ロイがそれを守ってほしいと頼んだことだけだった。

08 — 二つの不在

午前零時を少し過ぎた頃、ヴェイルの幕僚たちに届いたのは、商業地区での未確認の目撃情報だった。目撃者たちは、明らかに足を引きずっている男について証言した。一人は男の顔が当局の配布している写真に似ていたと確信していたが、もう一人には判断できなかった。

その目撃情報からレイチェルの所在は特定できなかった。

ヴェイルは、資料とその研究対象者がすでに同じ場所にいない可能性について評価を求めた。補佐官は、二つの目的を両立できない場合、資料の回収より確保命令を優先すべきか尋ねた。

「別の指示があるまでは、どちらも我々の目的だ」

デレンはテーブルの端で聞いていた。その二つの目的のために行われていることが、目的に見合うものなのかと誰かが問うまでに、街のどれほどの範囲を軍の支配下に置かなければならないのだろうと思った。

その疑問を声には出さなかった。目の前の机には、道路規制のため薬を入手できなかった高齢の患者に関する市民からの苦情が置かれていた。彼はそれを読み始めた。

街の別の場所では、まだ明かりのついている小さな建物の待合所にレイチェルが座っていた。向かいに座っている女性は眠り込んでいた。扉の上の時計は午前零時二十分を示していた。

レイチェルは電話を取り出した。ロイの名前を見つめたが、それには触れなかった。彼がどのような状態にあるのか分からなかった。安全に応答できるかどうかを先に確かめない限り、彼に何かを尋ねることもできなかった。

彼女は電話をしまった。

数本の通りを隔てた場所で、ロイは、すでに閉業した店舗の荷捌き場をかつて覆っていた屋根の下に座っていた。雨は彼の座っているベンチの端まで達していた。右手は再び冷たくなっていた。建物の向こうのどこかで車両の音が聞こえたが、そこから道路は見えなかった。

彼はレイチェルが最後に自分に言ったことを思い出そうとした。研究についての指示でも、待ち合わせるかもしれない場所についてでもなかった。高架道路の下で彼女が彼に頼んだことだった。

何も約束してはいなかった。ただうなずいただけだった。

それで十分だったのだろうかと彼は思った。

今は、未来について考えるよりも、立ち上がることの方が困難だった。前かがみになり、身体の右側の感覚が落ち着くのを待った。

周囲の街は存在しなくなったわけではなかった。無数の窓の向こうで、人々は、やがて翌朝を迎える夜を過ごしていた。屋根から道路へ水が落ちる音が聞こえた。遠くから、別の航空機の低い音が響いてきた。

彼は立ち上がった。

レイチェルが無事だという確証はなかった。彼女にもまた、ロイがまだ自由の身でいるという確証はなかった。政府は二人の捜索を続けていた。

病院を離れて以来初めて、歩き始めた彼の隣には誰もいなかった。

第09章 終。